

### 真子内親王（仁明天皇皇女）

皇女研究会

真子内親王は、仁明天皇皇女、生母は紀名虎女種子である。同母兄弟として常康親王がいる。真子内親王に関するもつとも詳しい史料は、『三代実録』貞観十二年（八七〇）五月五日の薨伝である。『本朝皇胤紹運録』には、名前のみで、頭注に『三代実録』の記事が示されている。

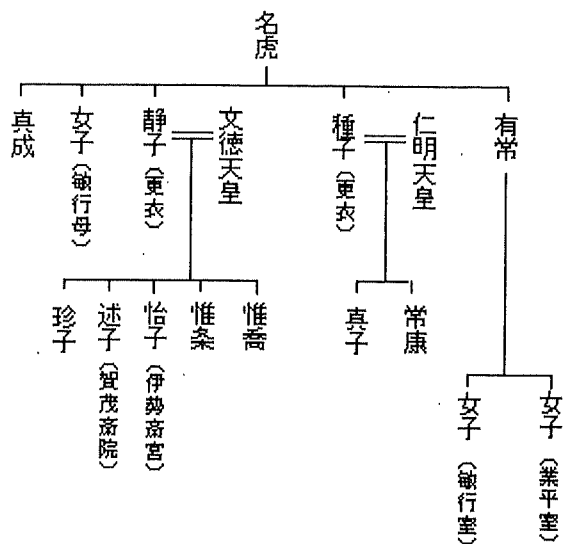
无品真子内親王薨。不任縁葬諸司。以喪家固辞也。帝不視事三日。内親王者。仁明天皇之女。母正五位上紀朝臣種子。正四位下名虎之女也。

この記事が載せられている貞観十二年（八七〇）はすでに清和天皇の御世である。この時点で真子内親王の外祖父、紀名虎は没しており、また同母兄弟の常康親王も、前年に薨去している。常康親王は、仁寿元年（八五一）

二月二十三日に出家しており、その動機について、川崎庸之氏は「元服を待たずに出家するようになった動機は、やはり「先皇諸子の中、特に鍾愛する所なり」といわれた点に求められるであろう。」と述べられている。

真子内親王については先の薨伝以外にこれといったものはない。そこで、まずは外祖父、紀名虎について追ってみた。紀名虎は、娘、種子を仁明後宮へ納め、静子を文徳後宮へ納れた。どちらも更衣としての入内である（次頁・略系図参照）。

紀名虎の名前が『六国史』に初見されるのは、承和二年（八三五）正月七日の叙位の記事である。このとき、藤原行道・高階石川・永原門繼・小野篁とともに、從五位下から從五位上に叙された。この後、名虎の昇進は早い。まず、同じ承和二年五月十日に名虎のみ、從五位下



から正五位下となっている。三年後の承和五年（八三八）正月七日には正五位下から従四位下へ、翌承和六年（八三九）四月二十五日には雨乞いの為の勅使の一人として、神功皇后の山陵へ使わされた記事があり、名虎は

「従四位下中務大輔兼備前守」と記されている。いうまでもなく備前は山陽道の要衝であり、上国である。承和八年（八四一）十一月二十日に、従四位下から従五位上となっている。承和二年（八三五）に名虎とともに従五位上に叙された高階石川がこのときに、ようやく従五位下から従五位上になったことから、名虎の昇進の異例の早さは明らかである。

八三五年正月	名虎、従五位下↓従五位上
五月	名虎、従五位上↓正五位下
八三八年正月	名虎、正五位下↓従四位下
八三九年正月	種子、无位 ↓正五位下
二月	名虎、掃部頭
四月	名虎、中務大輔兼備前守、勅使
八四〇年十一月	常康親王、志摩国答志島を賜る。
八四一年十一月	名虎、従四位下↓従四位上
八四二年七月	嵯峨上皇崩御、承和の変
八四三年正月	名虎、従四位上↓正四位下

八四四年十一月 名虎、刑部卿。この年惟喬親王誕生  
八四七年六月 名虎卒

承和九年（八四二）七月十五日、嵯峨上皇が崩じ、承和の変が起こる。淳和皇子恒貞親王が皇太子を廃され、仁明皇子道康親王（後の文德天皇）が立坊した。名虎の今一人の娘、静子は承和十一年（八四四）に文德天皇第一皇子惟喬親王を生んでいる。名虎の昇叙はこの後も、順調に続き、承和十年（八四三）正月二十三日に正四位下。翌承和十一年（八四四）正月には、刑部卿となる。この後、承和十四年（八四七）に卒去するまで、名虎の記事はなく、卒去時には、「散位正四位下紀朝臣名虎卒」とのみ記される。刑部卿から散位になったのが、何時であるのかは不明である。

名虎の昇進については、先にも述べたように他と比較して早いことである。なかでも承和二年に、従五位下から従五位上になるのに、わずか四ヶ月しか間がないこと、承和六年二月に掃部頭となっているが、二ヶ月後の四月

には中務大輔兼備前守となって山陵への勅使となつていくことの二点に何か特別な事情があると考えられる。考えられる要因としては、やはり入内した娘との関わりである。

名虎の娘、種子は、承和六年（八三九）正月八日の叙位で、无位から正五位下となった。他の人々と比較すると、仁明天皇がまだ皇太子のときに入侍した藤原冬嗣女順子と、藤原三守女貞子は、仁明天皇即位（八三三年）のとき、従四位下となっている。「寵愛之隆、獨冠後宮」と言われた藤原総継女澤子は承和六年（八三九）六月の卒時、従四位下であった。また滋野縄子は、承和三年（八三六）四月二十九日に無位から正五位下となっている。このことから、藤原氏の女性には、従四位下を直叙され、それ以外の滋野氏と紀氏の女性には正五位下から叙されていたということが伺われる。滋野縄子の承和三年の叙位については、皇子誕生の為と考えられる<sup>4</sup>。したがって、種子の承和六年（八三九）の叙位も常康親王の誕生のためと考えられる。

また承和十一年（八四四）に静子が惟高親王を生んだときに、名虎が、刑部卿となつてゐることから考えると、承和六年（八三九）に初めて名虎が掃部頭となつたことは、常康親王が誕生したことを伺わせる今一つの傍証となる。承和六年（八三九）に常康親王が誕生したとすれば、出家した仁寿元年（八五一）には十二歳であつたことになる。

常康親王の誕生が承和六年であるとすれば、さかのぼること四年、承和二年（八三五）に名虎がわずか四ヶ月で従五位下から正五位下へと昇叙したという事実は、種子が入内、更衣となつたためのものか、あるいはすでに更衣であつたとすれば、真子内親王誕生の為ではないかと考えられるのである。

そこで真子内親王の出生がいつかを考えてみる。その手がかりは、ほとんどないといつてよいのであるが、まず、『本朝皇胤紹運録』での仁明皇女の記載順を見てみたい。記載順は次の通りである。

時子内親王（滋野繩子所生）

新子内親王（藤原澤子所生）  
柔子内親王（滋野繩子所生）  
真子内親王（紀種子所生）  
親子内親王（藤原貞子所生）

『紹運録』の順番は、必ずしも出生順ではなく、出生が近接する場合は、生母の身分による場合があるので、注意する必要がある。それを考慮に入れても、皇太子時代にすでに入侍し、仁明天皇即位のときに従四位下となつてゐる藤原貞子所生の親子内親王より前に記載されていることから、親子内親王よりは、前の出生であると考えられる。親子内親王の誕生は、承和元年（八三四）から承和三年（八三六）と思われる。したがってそれよりも前ということになる。また、真子内親王の直前に記載されている柔子内親王の出生は、天長十年（八三三）から承和四年（八三七）と考えられる。そうすると、真子内親王は、天長十年（八三三）から承和三年（八三六）頃に誕生していると推定されるのである。真子内親王にとって外祖父にあたる紀名虎が、承和二年（八三五）

一月の叙位で従五位下から従五位上になつてゐるにもかかわらず、わずか四ヶ月後の五月十日に正五位下とさらに昇叙している理由は、そうしてみると真子内親王誕生に関わるものではないか。この推定の積み重ねに、そう大きな矛盾が生じないことから、一応、この線で考えてもよいと考える。仮に真子内親王が承和二年に誕生したとするならば、同母弟常康親王が生まれたと考えられる承和六年（八三九）には五歳、紀名虎が卒去した承和十四年（八四七）には十二歳、父仁明天皇が崩御した嘉祥三年（八五〇）には十五歳であつたことになる。

外祖父紀名虎が卒去した後は、順当に考えれば、名虎男、紀有常がその後見をしたであろう。有常は極官が従四位下周防権守、政界では志を得なかつたとされるが、歌人として在原業平等との交遊が知られてゐる。生母種子に関しては、貞観四年（八六二）に勅旨田を返納し、興福寺宿院を賜つたことが『三代実録』に見える。また、叔母にあたる文徳更衣紀静子が貞観八年（八六六）に没した記事はあるが、種子が亡くなつたという記事は

国史には見られない。したがって、真子内親王が薨去したときには、まだ種子は生存していたとも考えられる。

貞観十二年（八七〇）五月五日、真子内親王薨去。先の推定した誕生から考えると享年は三十六歳。前年に弟常康親王を失つてゐる。

真子内親王の生涯をみると、幼いときに承和の変があつた。変の当時は理解できなくとも、成長にしたがつて、皇位継承の危うさは理解したであろう。そして従兄弟惟高親王は文徳天皇の第一皇子であり、父帝に鍾愛されていたにもかかわらず、藤原氏と紀氏との勢力の差の前に帝位を望むべくもなかった。これも同じ紀氏の皇族として当然、身近に見聞したはずである。そして晩年には応天門の変（八六六年）があつた。藤原良房が摂政となつて、その勢力をいよいよ増大させていくことを見ていたはずである。そのような中で、同母弟常康親王が早くに出家し、脱俗したほど、あるいは異母妹にあたる親子内親王（藤原貞子所生）が父仁明帝の崩御の後、出家し、まもなく悲嘆のあまり亡くなつた。と記されるほどには、

自己を外に出すことはなかった。薨伝に見られる「不任  
縁葬諸司。以喪家固辞也。」という一文は、珍しいこと  
ではないにせよ、弟に先立たれ、史実に特記されること  
のなかったその生涯と重ね合わせるとき、藤原氏台頭の  
時代に、紀氏所生の一内親王としてひっそりと亡くなっ  
たのであろうことが、伺われるのである。

(一文字 昭子)

<sup>1</sup> 承和十四年(八四七) 六月十六日没

<sup>2</sup> 「文学史上の貞観期について」(『国語と国文学』四二  
—九・昭和四十年)

<sup>3</sup> 惟喬番親王の年齢は、『文徳実録』天安元年(八五七)  
四月十九日条に「年十四」とあることから逆算した。

<sup>4</sup> 「皇女総覧十六」(『瞿麦』十四号・平成十三年十一月)  
において、滋野繩子所生の本康親王の初冠の記事(『続  
日本後紀』承和十五年四月十四日条)から考えて、承  
和三年(八三六)四月三十日に、繩子が无位から正五  
位下を賜ったのは、本康親王誕生によるのではないか  
と考える。

<sup>5</sup> 「皇女総覧十八」(『瞿麦』十六号・平成十五年六月)  
によると、親子内親王は初筭の記事が『続日本後紀』

承和十四年四月十一日条にみられることから、推定さ  
れる。

<sup>6</sup> 「皇女総覧十六」(『瞿麦』十四号・平成十三年十一月)  
によると、柔子内親王の初筭の記事が『続日本後紀』  
承和十五年四月十四日条にみられることから推定さ  
れる。

<sup>7</sup> 『平安時代史事典』

<sup>8</sup> 『三代実録』貞観四年六月十四日条

<sup>9</sup> 『文徳実録』仁寿元年二月二十四日条には出家のこと  
が書かれ、仁寿元年九月十八日条の薨伝に「天皇崩後。  
哀慕無休。遂以滅性。」とある。

●史料 文頭の数字は西暦、( ) は筆者、( ) 割注

【真子内親王】母、紀種子／最終位、无品

870 (貞観十二年五月五日) 无品真子内親王薨。不

任縁葬諸司。以喪家固辞也。帝不視事三日。内

親王者。仁明天皇之女。母正五位上紀朝臣種子。

正四位下名虎之女也。 『三代実録』

真子内親王(頭注) 又云、貞観十二年五月五日、无品

真子内親王薨、母正五位下紀朝臣種子

『本朝皇胤紹運録』

皇女 真子内親王

『皇代記』(群書類従本)

皇女 真子内親王

(母同常康)

『帝王編年記』

皇女 貞(真イ)子内親王

(母同常康貞観十二年二

月八日薨)

『一代要記』